



おおうらてんしゅどう
12 大浦天主堂

12. Oura Cathedral

「大浦天主堂」は、「潜伏」が何をきっかけとして終わったのかを示す構成資産である。

日本の開国により来日した宣教師と潜伏キリシタンは、2世紀ぶりに大浦天主堂で出会った（「信徒発見」）。

その後続く大浦天主堂の宣教師と各地の潜伏キリシタン集落の指導者との接触によって転機が訪れ、カトリックへ復帰する者や、引き続き自分たちの信仰形態にとどまる者、神道や仏教に改宗する者に分かれ、「潜伏」は終わりを迎えることになった。



大浦天主堂は開国後の1864年に建設された。天主堂は、1597年に長崎で殉教した日本二十六聖人の殉教地の方向に向けて建てられている。正面上部には、日本人にも理解できるように漢字で「天主堂」と書かれており、神父は禁教下でもひそかに信仰していた信徒がいることを期待していた。



撮影：池田勉

「信徒発見」150周年を祈念して行われたミサである。「信徒発見」のニュースは、各地の潜伏キリシタン集落に伝えられ、指導者たちが天主堂をひそかに訪れて、組織的にキリスト教へ復帰する準備が整っていった。「信徒発見」の舞台となった堂内の空間は保持されており、脇祭壇のマリア像は当時のものである。